

第1回 運営会議 議事録

日時：平成20年8月29日

場所：大阪府住宅まちづくり部

タウン推進室管理課 会議室

(りんくうゲートタワービル24階)

出席者（敬称省略）

増田 昇（大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授）

澤木 昌典（大阪大学大学院工学研究科 教授）

下村 泰彦（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 准教授）

清野 博子（元読売新聞編集委員）

河原 美也子（うみべの森を育てる会 代理）

前中 久行（大阪府立大学大学院 生命環境科学研究科 教授）

松下 義彦（泉佐野市 都市整備部長）

おもな意見

議案：パーククラブについて

この運営会議の役割としては、パーククラブをどのように自立・支援だけではない。他の役割は、既存団体、行政、パーククラブが持ち込む活動プログラムをうまく調整していくことである。また、整備に関しても調整も行う。さらには、うまく運営できているかをチェックすることもある。この4つが昨年度の準備会で明確になった運営会議に役割である。その他の役割がないかを議論することが本日の1点目の議案だと考えている。また、パーククラブを育成するための議論がもう1点の議案である。

この緑地ができれば、樹林管理を勉強できる場が増えるので、多くの人に参加すると思われる。泉佐野だけではなく、他の地域からも多くの方が参加されるという意味では、いいことだと思う。

パーククラブはハンドメイドだけでしか活動できないのか、それともハーフメイド、フルメイドまで入ることができるのか。フルメイドでも花壇管理等の維持管理活動であれば府民も関わることができるものと感じているが、その明確なルールがない。そのルールはパーククラブが決めるのか。

基本的には、すべての事項を運営会議で調整することになる。資料に書いているように、運営会議にはパーククラブの代表者が入ることになっているため、そのパーククラブの代表者が運営会議に議案を持ち込むことによって、公園利用のルールは決められる。

パークレンジャーは維持・管理を自発的にすることが特徴と理解をしていた。そのため、事務局から提示されたカリキュラムで案1の知識習得型の初心者向けでは、修了後パークレンジャーとしてすぐに活動できないのではないかと思う。案3のイベント企画型もすぐに活動できないので初年度に行うカリキュラムとしてはふさわしくないのではないか。案2の技術習得型の初心者向けが、初

年度のカリキュラムとして一番対応しているように思える。

また、序幕で1回しか養成講座を開催できないのであれば、30人という定員はあまりにも少なく感じる。この公園に関わりたいと思う人は府下にはたくさんいるはずである。そのような人が養成講座を受ければ、養成講座修了後、泉佐野で活動する人は残らないのではないかと。

実施日も祝日と平日では養成講座に参加する層も異なる。選定方法も基本は抽選だと感じている。ただし、卒業後は泉佐野丘陵緑地で活動してもらうことを受講の条件とするかは議論すべきところである。

受講者があらかじめ設定された講座を自由に選択することができるように設定してはどうか。最低受講時間数を決め、必須講座や選択講座を設定することも考えられるのではないかと。多様な人を育てようとするならば、いろんな選択があってもよいと思う。

養成講座以降も受講者自らが講習会を企画して知識や技術を習得しているケースもある。例えば、案2のような技術を習得した後に、ホストとして活動できるように「インタープリター講座」を受講者自らが企画したり、NPO法人化が必要であれば、他の団体が実施しているNPO講座を受講しに行くといった形を取らないといけない。すべてを養成講座に求めることは難しい。案3や案4はある程度パーククラブが育った後に実施して、当面は案1、2を実施して参加者の裾野を広げる方がいいのではないかと。

基本計画では序幕の期間は座学と実習を交えて実施するとなっている。これを踏まえて、パーククラブの母体を作るという意味では、これだけは習得していて欲しい基本的な知識・技術を座学と実習を交えて習得してもらう。その後、少し役割分担を意図したコースを公園側が設定しておき、ある程度知識・技術を習得できた後に企画の養成講座を行うことがよいのではないかと。将来的にはパーククラブが企画した養成講座に新たな受講生が知識・技術を習得する形になるのが理想だと思う。

講座の内容として、公園のテーマや理念はしっかり出しておくべき。案2では樹林管理型、自然観察型、農作業型以外に何かないか考えた方がよい。景観であればランドスケープデザイン、環境であればリサイクル、自然の中での有機物の循環等がある。公園の理念に沿った講座内容を企画していく方がよいのではないかと。

受講者の技術の差もあることから、初めの1、2年は養成講座のカリキュラムは並行して2つほどやってみてはどうか。パーククラブがある程度育ってきたら、養成講座のカリキュラムをパーククラブ自身に決めてもらう方向性もある。そうすれば、府の力が少なくても受講者の要望に応じた養成講座の運営ができると感じる。

土日・祝日と平日とでは層が異なる。できるならば土日・祝日と平日の両方で養成講座を実施し、お互いの交流を図ることができる機会も設けてほしい。

選考方法では 400～800 字で公園に対する思いを記述してもらおうと評価しやすいのではないかと。

スケジュール的にはどのようなイメージがあるのか。

遅くとも年明けには募集をかけて、春には養成講座を開催したい。そのため、年内にはカリキュラムと募集要項をつくりたい。

本日議論した内容を振り返ってみると、1カリキュラムが動くことではなく複数のカリキュラムを実施することが望ましい。少なくとも休日と平日の2つは必要である。また、募集の際には、泉佐野に思い入れを持っていて、養成講座終了後、公園内で活動していくことを前提に受講してもらほうがよい。養成講座のカリキュラムとしては、基本的な部分を座学と実習を併用して学んでもらい、その後インタープリター、マネージャー等の技術を深めていく方向性が見えてきた。事務局へのお願いとしては、これらの意見をもとにカリキュラムを充実させてほしい。

緊急の課題ではないが、運営会議そのものがどういう役割を担うのか、あるいは開園の定義、外部とのソーシャルネットワークをどのように構築するのか、という議案もできるだけ早めに議論したい。そうしないと既存団体や企業との連携が遅くなる。

また、養成講座実施後の対応に記されている「運営会議のメンバーを制するため材料とする」とは違うものと考えている。おそらく、パーククラブができるとその中で代表者を話し合って決めるものである。事務局には、その部分に気を配った資料を作ってもらいたい。

現場で実習を行う場合、道具や備品、運搬等の準備にも時間がかかる。そのため、早めに養成講座の内容をシュミレーションすることも必要である。

講師の先生方を選ぶことも非常に重要である。そのあたりの対応も考えておきたい。